## 11.STN tルを PC 位相差板 2 枚で補償する実験



手順;

PR ソフトのメニュー 1. 楕円偏光板測定を使用して、偏光板+STN いを固定試料台に偏光板を下側にして置き、楕円偏光状態を測定します。

このとき、必ず測定波長を5つ指定し、ストークスパ<sup>®</sup> ラメータ表示をありに選択します。 LCD-OPTIMA に の測定データを読み込み、例えば位相差板2枚(ここでは PC を仮定)の条件を次のように設定します。(PCの波長分散曲線は予め調べて おきます)

R1 の範囲	340	380	1		
R2 の範囲	380	420	1		
1の範囲	0	90	1		
2の範囲	0	90	1		
最適化条件	//入射直線偏光				

できるだけ で得られた Reの数値に近い位相差板を2枚準備します。

仮に、R1=358nm, R2=409nmの PC 7ィルを使用するとして、再度 LCD-0PT IMA で

2の計算範囲を設定して計算を実行します。その結果、 1=70.5°,
2=29°が得られました。



実際に で測定した偏光板+STN thの上に、pc358 と pc409 とをそれぞれの遅相 軸が の計算結果の 1, 2 の方位になるように置いたものについて、PR ソフト のメニュ-1.楕円偏光板測定を使用して楕円偏光状態を測定します。 その結果は、LCD-OPT IMA の計算結果に近い偏光状態になっていることがわかり ます。

## 偏光板+STN 切の測定結果





## 偏光板+STN 切+pc358+pc409の測定結果

CONTRACTOR OF CONTRACTOR	and a second	CONTRACT IN A DATA	ANY CONTRACT DESIGNATION		
Din.1]	(No.7)	Dis.31	[No.4]	06.51	
A			(A)		//
$(\pm)$	(E)			(E)	1/
111/2 (111-				++++)	11 /
	( = )	( = )			11 /
	1				11 1
A (rm) + 451.2 W + -5.4	A (rm) + 438,8 W = 0.0"	A (rm) + 548.8 U = 6.1*	A (res) + 587,0 W = 4.6"	A (rm) + 627.7 W = -0.5*	80
47 = 64.4"	4 e = 45,0°	1 2 18	47 + 6,E"	47 + 67.1	
Notron) 4 202.1	Netron = 12.2	heirm) = 110.4	320 + 1	3100 × 2	111
max(X) = 43.3 min/max10.000	mp(X) > 49.5 min/mp2.0.047	min(30 = 53,4	mix(X) = 54,7 nin/mart 8,009	max(X) = 55,1	111
w/b + 0.373	arb ± 0.209	a/b = 0.125	a/b < 0.095	w/h = 0.092	11
ψ <sup>+</sup> + 174.6 <sup>+</sup> ψ <sup>+</sup> + 84.4 <sup>+</sup>		0° = 6,1° 0° = 7,6°	4" 1 4.6" 4" 1 6.6"	$\Psi' = 179.5'$ $\Phi'' = 67.1'$	
57 + 0.807	51 + 0.917	51 0.547	S7 0,969	\$1 + 0,983	
Si 2-0,155	52 + 0,000	56 0.000 69 0.347	S 1 0,150	Si - 0,010	

